

## 吉和診療所 吉川 仁所長 からの便り

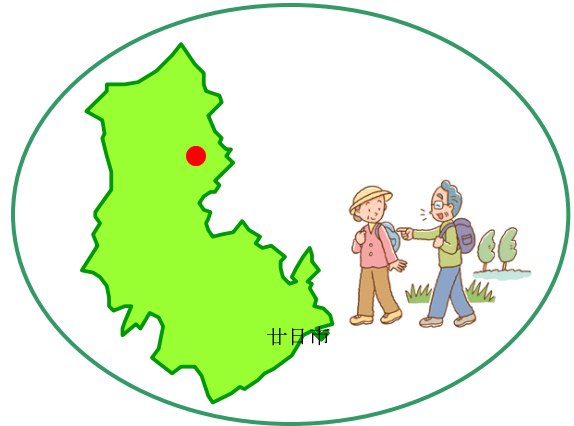


### 診療所の患者数

- 1日の患者数 → 平均 25名
- 人口 → およそ800名
- 高齢化率 → 約40%



〔 吉和診療所近景 〕



廿日市市吉和診療所の吉川(きっかわ)と申します。診療所での仕事の状況をおたよりいたします。

私は、診療所と同じ廿日市市の佐伯地区出身で、自治医科大学卒業後、医師 15 年目になります。吉和診療所は 4 年目です。

廿日市市吉和地区は、廿日市市との合併前は吉和村として独立していたところです。広島県西部の山間部にあり、山口県に接しています。広島市へと通じる太田川の最も上流に位置し、川岸でも約 600m の標高が

あります。清らかな水で栽培されたわさびは有名ですし、四季折々の風景がほんとうに美しい地域です。春は道端に水仙が咲き乱れ、初夏からは川魚釣りが楽しめます。秋は紅葉に包まれ、冬は数十 cm の積雪があります。温泉宿、別荘、釣堀、スキー場もある観光地です。

人口はおよそ 800 人、高齢化率は 40% を超えます。

吉和診療所は、そんな吉和地区唯一の医療

機関です。外来・往診のみで、入院機能はありません。医師 1 名、看護師 2 名、事務 1 名の体制で診療します。一日あたり平均 25 名、多い日で 40 名強の患者が訪れます。夜間・休日については、診療所の電話にかけると、医師の携帯電話に転送されるしくみです。土日祝日の患者は、平均 2 名くらいです。

在宅でのターミナルケア患者も時々おられます。自宅から離れないことを望まれ、家族のマンパワーにも恵まれる方は、年 1 ～2 件程度です。そのような際には、往診、在宅での麻薬の導入維持、訪問看護、地域内のデイサービスセンターと連携しての介護軽減など、出来ることをやっております。

他の医療機関へは、車で 20 分以上かかりますが、道路はよく整備されており、通院は困難ではありません。1 日 3 便ですがバスもあります。冬季は、積雪のため 1 シーズンに 1～2 回バスが運休になることもあります。除雪はしっかりしています。そのような中、有難いことに診療所をかかりつけとして選んでくださる方が少なくなく、地域の診療所を大事にしてくれていることを強く感じます。

一応内科の標榜なのですが、断然多いのは腰・膝・肩などの痛みです。必要と判断すれば、理学療法、局所注射、関節・滑液包注射や、仙骨硬膜外ブロック注射など、出来ることはします。注射やブロックは、医師 3 年目・4 年目の時、神石三和病院（現在の神石高原町病院）の当時の院長に教えていただきました。また、医師 7 年目、8 年目の時、公立みつぎ病院（現在の尾道北総合病院）では、管理者や院長のご好意により、様々な科の外来診療や、検査室での簡易検査を、週 1 回研修する機会をいただきました。そのときの経験が、この診療所ではとても役に立っています。

また、二次医療機関の対応は温かいです。困難なケースは快く引き受けてくださいます。

小児も訪れます。脱水や肺炎、虫垂炎など、診断や治療に採血や点滴を必要とすることもあります。毛細管採血が出来るようになって、小児の血液検査反復が苦でなくなりました。医師 9 年目から 3 年間、自治医科大学で産婦人科の研修を受けた時、新生児の採血法として教えていただきました。現在も週 1 回、診療所から車で一時間の場



所にある広島総合病院にお邪魔して、産婦人科研修を続けています。

自治医科大学の鈴木教授は、「産婦人科」というより「女性科」と呼ぶほうがふさわしい、そして人口の半分は女性である、と話されていました。吉和地区でも、当然人口の半数は女性です。

吉和診療所は、いま産婦人科的な疾患を積極的に診る姿勢はとっておりません。それでも、診療所に赴任して4年目ともなると、更年期や月経不順など、女性ならではの問題を相談される場面は増えてきました。そして、とくに更年期の診察は、除外診断と長い病歴聴取がその診療の大部分で、本人をとりまく社会的な要素も強く関わりますから、本来かかりつけ医による診察が望ましいのだろうと実感しています。病院で更年期外来をするよりも、現状や治療へのお互いの理解が容易です。なお、癌検診などは、現時点で診療所で行うべきではない



と考え他院へ依頼しています。

ともかく、これまで様々な病院・診療所で、出身校や利害を超えて、様々なスタッフに教えていただいた有難さが身にしみます。それを、等身大で患者に還元していくことがせめてもの努めです。

ところで、診療所が「地域医療」から連想しやすいからか、実習に来られる医学生が最近増えてきました。いつしか、教える側に回るようになりました。そのときは、

- ◆ 診療所でも病院でも患者は患者、医者は医者。人对人の真剣勝負はどこでも同じであること。
- ◆ どんな都会でどんなに専門的なことをしていても、必ず地域医療の一翼を担っていること、一次医療機関としては、そのような専門医の存在をとっても有難いと思っていること。
- ◆ 医師として、自分のできること、できないことに素直であるべきこと。

そんなことを、わずかでも伝えられれば幸いと、無学を恥じつつも引き受けさせていただいてます

